

韓国サーカスの今日的状況に関する研究ノート： 運営形態、演目、構成メンバー

林 史樹

0. はじめに

韓国におけるサーカスの認識は高く、世代によっては郷愁を感じさせ、好奇心を駆り立てるものであるが、日本におけるサーカスと同様に、すでにどこでもみかける存在でなくなっている。今日では、とくに海外からくる有名サーカス団などに限って脚光を浴びたりもするが、国内のサーカス団に関心を払う者はあまりいない。ときにメディアが、「懐かしの」あるいは「追憶の」といった冠をつけて紹介するにとどまる。先行文献もわずかながらでているが、韓国サーカスが断片的に紹介されることはあっても、系統立てて紹介された文献はない。研究書としては、拙書〔林 2007〕が挙げられる程度である。

1970年代まではまだ人々の娯楽の一角を担って盛況であったが、1980年代からは、ずっと斜陽化の一途をたどってきた。それでも、1990年代までは韓国人曲芸師が主体となって公演を続けてきたサーカスであったが、2000年代になると、韓国人曲芸師が減少していく一方で、中国人曲芸師が舞台に立つことが増えてきた。さらに、中国人曲芸師が各地のイベントなどにも参加する機会が増えた。これまで韓国で親しまれてきたサーカスは、すでに中国との関係なしに成り立たなくなっているのである。日本のサーカスも同様に、1990年代に活動を続けていた柿沼サーカスや国際サーカスなども、西欧からの曲芸師以外に、やはり中国、フィリピンなどの曲芸師を雇用し、新た

にベトナムなどに目を向けていた。

中国人曲芸師流入の背景には、韓中関係の変化が大きく作用している。1992年の韓中国交正常化以降の流れとして、1990年代中期頃から、まず中国朝鮮族においてビジネスチャンスを求めて韓国に渡る者が増え〔聶 2005: 25〕、朝鮮族を間に挟んだ韓中交流が盛んになる。それが1999年末頃からは韓中交流自体が活発化してくる。多くの韓国の人々も中国に関心を向け始めることで、韓国に中国語ブームが訪れ、韓国内において中国の位相が高まった。中国人曲芸師による公演は、以上の背景があつてこそ成立したといえる。

それでは、具体的に彼らが韓国サーカスに組み込まれることによって、どのような変化がサーカスに起こったのだろうか。本稿では、まず演目を中心に、運営形態や構成メンバーにみられた変化を記録する。そして一見して、韓国社会と切り離されて自由にみえる移動集団であるサーカス団が、どのようにホスト社会である韓国社会の情勢や、国際関係であるところの韓中関係の影響を受けてきたかをみていく。

なお本稿では、本来は明確な区分が行いにくい「韓国人」や「中国人」といった表現を便宜上用いていくことを断っておきたい。

1. 韓国サーカスを取り巻く環境の変化

1-1. 韓国サーカスの変遷

韓国におけるサーカスは1900年前後に日本を経由して入ったのを始まりとするのが一般的である。それらは日本人経営によるサーカスで、朝鮮半島から満州にかけて公演をしていた。その過程で、サーカスの団員に韓国（朝鮮）人の曲芸師が加わり、1930年頃から徐々に韓国（朝鮮）人経営者によるサーカスが誕生してきた。それが今日、韓国で行われているサーカスの始まりといえる。本稿では、当時の脈を引いており、現在の韓国に根づいたサーカス団を「韓国サーカス」と総称して用いているが、当初はさまざまな構成員が

韓国サーカスの今日的状況に関する研究ノート：
運営形態、演目、構成メンバー

混じった状況であったと考えられる。

朝鮮全土で受け入れられたサーカスであるが、太平洋戦争を前に多くが統合され、1950年代は韓国で朝鮮戦争が起きたことで一時期は解散状態となった。その後、復興してから多くのサーカス団が立ちあがり、1950年代中盤から1960年代中盤にかけて、一番の隆盛を誇ったといわれる。1970年代も引き続き、興行は盛況であった。ところが、1980年代に入ると、徐々にサーカスが斜陽化していく。カラーテレビが普及し、スポーツなどが盛んになり、一時期人気落ちていたといわれる映画が1980年代半ばから再び人気を取り戻すなど、娯楽が多様化し、集客力が落ちたためである。

さらに追い打ちをかけたのが、多くの曲芸師がサーカスを離れたことである。まず、テレビの普及によってサーカスのショーや司会の担当者がサーカスを離れていったと考えられる。サーカス内でも「テレビにでている誰それはサーカス出身である」といったことがよくいわれる。それに加え、1980年代はナイトクラブからの引き抜きが多かったといい、それにもなって曲芸師がより稼ぎを求めてサーカスから離れていった。

1990年代になっても、サーカスの斜陽化は進んでいく。とくに1991年に起きたシム・ジュヒ事件は社会問題となった。これまであまり関心を向けられていなかった児童福祉法に社会の目が向けられることで、サーカスのイメージも低下した。

それでも1990年代には、大宇、東春、飛龍、天光の各サーカス団に加え、亜細亜サーカスの団長が数人の曲芸師を率いて韓国南部の遊園地「馬山トッソム」で公演を続けるなど、45つのサーカス団が興行を続けていた。まだ、イベント会場などを中心に興行が成り立ったのである。それが1990年代後半になると、徐々に興行が成り立たないサーカス団がでてくる。そのうち、いち早く衰退したのが飛龍サーカスであった。一方、既存のサーカスが抱える問題点を改善し、よりエンターテインメント性を求めて、1998年12月に韓国

曲芸芸術団が立ち上がる。しかし、経営が立ちゆかず、韓国曲芸芸術団は2年ほどで解散する。

このような状況で、2000年頃から中国雑伎団の曲芸師が流入し始めた。ただし、それは東春サーカスが主導して行うだけで、大宇、天光といったサーカス団は追随することはなかった。資金力の問題でいえば、これらのサーカス団がより深刻で、安い労働力を用いたかっただけであろうが、中国との間にパイプをつくることができずにいたし、そこまでの展開力をもたなかったといえそうである。

その後、天光サーカスがほとんど公演をしなくなり、自然に解散したのに続き、2003年には、それなりに地方公演を続けていた大宇サーカスも幕を閉じる。

対照的に、東春サーカスが本格的に中国人曲芸師を招請し始め、絶えず20名ほどの保有するに至る。そして現在、韓国人曲芸師との混成団体である「一部団体」に加え、中国人曲芸師のみの「二部団体」をつくり、2つの団体に興行を続けている。同時に、「イベント」という興行方法も現れた。中国人曲芸師グループを地域イベントなどに出演させ、報酬をもらうのである。これにはベンチャー企業的に行う場合と、サーカスが所属している中国人曲芸師を講演の合間をみて出演させる場合とがある。

2003年には中国の曲芸師を主体として太白サーカスが、2006年には数名の韓国人曲芸師も取り込んだかたちで長城サーカスが創団される。しかし、長城サーカスは3ヶ月ほどで解散する。太白サーカスは昔年の大規模サーカスの名称を借りて創られたが、現在は多額の借金を抱えている。公演を中止すると取り立てが殺到するため、取り立て逃れで公演を続けているとも聞く。現在は、この太白サーカスと東春サーカスが中国曲芸師を取り込んで、サーカスの脈をつないでいる。

1-2. 韓中関係の変化

韓国サーカスを取り巻く社会も、1990年代に入って大きく変化した。とく

韓国サーカスの今日的状況に関する研究ノート：
運営形態、演目、構成メンバー

に本稿とのかかわりでいえば、韓中関係の変化が目立つ。中国は朝鮮半島と地続きで隣接しているばかりか、黄海をはさんでも距離的に近いため、植民地期などには人的交流が盛んであった。それが南北分断後、38度線以北の北朝鮮はともかく、以南の韓国では資本主義体制から、また朝鮮戦争の記憶から「共産党中国」を意識して避けてきたのである。

その状況が変化したのは、1992年の韓中国交正常化である。これによって、これまで国交を結んできた中華民国（台湾）と断交し、大陸への人的交流が加速化していく。同時に、表立って中国でのビジネスチャンスを探めていくようになった。実際には、すでに国交正常化前の1990年9月15日に、仁川（韓国）－威海（中国）航路が開通しており、国交正常化直後の1993年5月22日に、仁川－青島航路が開通している。朝鮮族の親戚訪問などを皮切りに小規模ビジネスが増加していく。

1990年代後半になると、地方の行政自治体が個別に中国との交流をさらに拡大するためのイベントを考えていく。それは例えば、新たなチャイナタウン建設計画や、仁川や釜山が1999年から着工し始めた中華街整備であったりもする。ただし、これらは見方を変えれば、単なる交流促進というより、すべて中国という巨大な市場をにらんだ動きという色合いが強い。

そのようななか、とくに中国との関係を持たない人々においても、中国ブームが起きる。これまでは冷遇してきた中華学校に子弟を入学させたり、果ては直接に中国現地の学校に子弟を送ったりもする。家族ぐるみで移住して中国語を学ばせながら、生計を立てていく者もいるといったように、朝鮮族や韓国在住の華僑との関係がなくても、中国に接近していく人々が増加した。これは、たぶん1997年に起きた金融危機と前後して訪れた、韓国内での不況ともかかわっている。

実際に、サーカス団が中国と関わりを持ち始めるのは2000年頃からといわれるが、それまでも、海外から曲芸師を招請する考えはあった。1994-5年

においても、日本サーカスの事情を探ると同時に、日本サーカスが招請していた外国人曲芸師の招請費用についても情報を求めている。つまり、日本同様に、西欧やフィリピンなどからの招請なども選択肢に入れる一方、以上のような背景から急激に韓中の距離感が縮まり、なおかつ世間によく知られた雑伎団の伝統を持つ中国から曲芸師を招請するに至ったといえるのである。

2. サーカス演目の変化

2-1. 1990年代のサーカス演目

それではまず、戦後になって再び中国人曲芸師が組み込まれる直前の時期にあたる、1990年代のサーカスの演目をみてみたい。以下は、1994年から1995年にかけて行われていたプログラムである [林 2007]。

(※曲芸師はすべて韓国人で、通し番号の後ろの f は女性、m は男性をあらわす)

- 劇場前の券売所で呼び込みをしている構成員を通じて入場券を購入する。
- 入場券を受け取って、劇場の出入口である木戸から入場する際に、木戸を担当する者に入場券を渡し、代わりにカメラの抽選券を受け取って劇場内に入る。
- 劇場内の舞台正面にはごぎを敷いた箇所があり、ごぎに座るのでなければ、劇場の後方で料金を別途に支払って椅子を借りてきて座る。
- 開演は観客の入りを見て決められるため、入場してから観客で席が埋まるまでの間、かなり劇場内で待たされることになる。その間は、劇場内にある売店で菓子類を買ったり、場内に設営された仮設トイレで用を足すことになる。
- 「大変長らくお待たせ致しました」とマイクで放送があり、サーカスが開演する。

韓国サーカスの今日の状況に関する研究ノート：
運営形態、演目、構成メンバー

◇サーカスの演目

◎一部：魔術ショー

①手品* <1m> と <2f> で約 40 分／

◎二部：地上曲芸

②小一丁ブランコ* <3f> か <4m>、ときに <5m> で約 3 分

[大きく揺らしたブランコのうえで、アクロバットの姿勢をとる曲芸]

③一本竹* <6f> と、<3f> もしくは <7m> で約 3 分

[肩に竹を立てたうえで子供をのぼらせ、さまざまなポーズとらせる曲芸]

④四丁椅子* <8f> で約 2 分

[椅子を 4 つ重ねたうえで片手で倒立するなどアクロバットの姿勢をとる曲芸]

⑤マンボ* <8f> に <3f> が一緒に約 2 分

[円筒に板を置いたうえにあがり、バランスをとってみせる曲芸]

⑥柳樽* <6f> で約 3 分

[台のうえで仰向けになり天に突きだした両足で、樽をまわすなど自在に扱う曲芸]

⑦アクロバット* <3f> ・ <9f> ・ <10m> で約 4 分

[音楽に合わせ、身体の柔軟さを強調したアクロバットをみせる曲芸]

※韓国人の姉妹 <3f> ・ <9f> が 1 枚 1000 ウォンの下敷きをもって客席内を販売してまわる

⑧水瓶* <6f> と、<10m> もしくは <7m> で約 3 分

[台のうえで仰向けになり、両足で子供が入った水瓶をまわしてみせる曲芸]

⑨針金渡り* <8f> で約 3 分

[高さ約 2 m にはった針金のうえで歩いたり、仰向けに寝てみせたりする曲芸]

⑩犬の動物芸* <8f> と犬5匹で約5分

[子犬に鉄砲で打たれたまねや、二足歩行や逆立ち、荷車を引かせたりする曲芸]

⑪火炎* <4m> で約3分

[火のついた輪と刃物がついた輪のなかを跳んでくぐり抜ける曲芸]

⑫ヨーガ妙技* <3f>・<9f>・<10m> で約5分

[小さな箱に入ったり、頭で倒立して両手足で輪をまわしたりする曲芸]

※姉妹が再び下敷きをもって客席をまわる

⑬ジャグリング* <11m> で約5分

[ボールを用いた曲芸や、輪や火のついた棍棒でジャグリングを行う]

⑭大一丁ブランコ* <8f>、ときに<11m>も出演で約4分

[両手を放した状態で大ブランコをこいだり、椅子をおいて座ってみせる曲芸]

⑮空中逆さ歩行* <4m> で約2分

[逆さまでぶら下がったまま、天井に等間隔でつけた輪に足をかけながら往復する曲芸]

⑯組み体操* <3f>・<4m>・<8f>・<11m>・<12m>・<13m>ほか<5m>・<10m>・<14m>・<15m>で約15分

(道化役として<13m>が出演、代役が必要としたときは<11m>・<5m>がつとめた。また数度だけ<16m>が出演し、道化を演じたことがある)

[数名の曲芸師が出演し、道化をまじえながら組み体操を行う]

※空中サーカス用の安全ネットを張るために約15分の幕間となり、幕間を利用して韓国人司会者<17m>が抽選会という名目でカメラ販売を行う

韓国サーカスの今日的状況に関する研究ノート：
運営形態、演目、構成メンバー

◎三部：空中サーカス

⑰ 綱渡り * <3f>・<4m>・<6f>・<8f>・<12m> ほか、<5m>・<13m>・<15m> で約 15 分

[高さ 7-8 m の綱のうえを、目隠しをしたり、駆け足をしたり、肩車をしてわたる曲芸]

⑱ 空中ブランコ * <4m>・<12m>・<13m>・<16m> ほか、<5m>・<15m>・<18m>・<19m> で約 15 分

[天井部に取りつけた 2 つのブランコを用いて、曲芸師が空中を往来する曲芸]
(そのほか、三部で <3f>・<4m>・<15m> らでオートバイ曲芸が行われることがあった)

- 「ありがとうございました、途中から入場された方は場内整理が出来次第、次の公演が開始されますので、しばらくお待ちください」とのアナウンスが入る。
- 退場する観客には、木戸を通りすぎる際に、「近所に宣伝してください、またきてください」と割引券が配布される。

2-2. 2000 年代からのサーカス演目

次に、2006 年に行われた同一サーカス団のプログラムをみでみる。1990 年代のものと、司会者が代わったためにアナウンスなどに変化があった。また開始や終了の挨拶もスタイルは異なるが、内容自体に大きな変化はないと考える。ここでは一例として、2006 年 8 月に慶尚北道奉化郡で行われた公演（午前 1 回目）について、順を追ってみていく。

(※通し記号をつけたのは韓国人で、記号の後ろの f は女性、m は男性をあらわす、なお、<8f> = <ef>、<16m> = <dm> で、<cm> は 1990 年代も補助をしていた)

- 劇場前の券売所で呼び込みをしている構成員を通じて入場券を購入する。
- 入場券を受け取って、劇場の出入口である木戸から入場する際に、木戸を担当する者に入場券を渡し、代わりにカメラの抽選券を受け取って劇場内に入る。
- 劇場内には舞台正面にござが敷いてあり、劇場の後方には椅子がおいてあるので、自由に座る。
- 開演は観客の入りを見て決められるため、入場してから観客で席が埋まるまでの間、かなり劇場内で待たされることになる。その間は、劇場内にある売店で菓子類を買ったり、場内の仮設トイレで用を足す。
- 「大変長らくお待たせ致しました」とマイクで放送があり、サーカスが開演する。

(12:30 開始アナウンス)

①手品*中国女性1名に補助として中国女性2名で約6分(12:34-12:40)

[箱からハンカチを取り出すなどの手品]

②ポール*中国男性6名に補助として中国女性1名、中国男性1名で約4分(12:41-12:45)

[舞台中央に2本のポールを立て、6名が団体アクロバットをみせる]

※そのまま照明を落として中国人曲芸師が道具を片づける

③ヨーガ妙技*中国女性1名に補助として中国女性2名で約6分(12:46-12:52)

[ロウソクを用い、それを加えたまま落とさずに両手で座布団をまわすなどする]

④帽子のジャグリング*中国男性5名で約3分(12:53-12:56)

[団体でそろいの帽子をつかったジャグリングで、肩車をしながらも行う]

韓国サーカスの今日的状況に関する研究ノート：
運営形態、演目、構成メンバー

⑤縄を用いたアクロバット*中国男性1名、中国女性1名で約6分(12:57-13:03)
[天井からつるした縄に男女2名があがり、縄がまわされるなか、アクロバットを行う]

⑥フラフープ*中国女性1名に補助として中国女性2名で約4分(13:04-13:08)
[複数のフラフープを同時にまわし、最後には胴が隠れるほど多くのフラフープをまわす]

⑦一輪車* <af>・<bm> に補助として <cm>・<dm> で約3分(13:08-13:11)
[一輪車に乗りながら棒や火の棒を用いてジャグリングを行う]

⑧ジャグリング*中国男性1名で約3分(13:12-13:15)
[ピンポン球5つとブーメラン2つを用いたジャグリングを行う]

⑨子犬の曲芸* <ef> に補助として <bm>・<cm> で約8分(13:16-13:24)
[立ち歩き(犬1)、ハードル跳び(犬1)、火の輪くぐり(犬2)、逆立ち歩き(犬1)、輪を押す(犬2+犬1)]

⑩赤いカーテンを用いた空中妙技*中国女性1名で約6分(13:25-13:31)
[天井からつるした2本のカーテンに両手を絡ませて上下したり、多様なポーズをとる]

⑪二人ブランコ*中国男性1名と中国女性1名で約4分(13:32-13:36)

※中国女性2名が1枚1000ウォンで下敷き販売をする(13:37-)

※針金渡りの準備をする

⑫針金渡り* <af> に補助として <bm>・<dm> で約6分(13:39-13:45)
[高さ約2mにはった針金のうえで歩いたり、仰向けに寝てみせたりする曲芸]

⑬体操輪くぐり*中国男性6名で約6分(13:46-13:52)
[マットの上に輪を縦につなげておき、その輪のなかを数名がマット体操をし

ながら交差して飛び合う]

※命綱をつける

⑭大一丁* <ef> と中国女性1名に補助として <cm>・<dm> で約7分
(13:53-14:00)

[両手を放した状態で大ブランコをこいだり、椅子をおいて座ってみせる曲芸]

⑮仮面マジック*中国女性1名で約3分(14:02-14:05)

[仮面をつけた人間が舞台上で仮面の早変わりをする中国伝統のマジック]

⑯座布団まわしと水瓶*中国女性1名と中国男性1名に補助として中国男性
4名で約5分(14:06-14:11)

[台の上に仰向けになって両手両足と口にくわえた棒の上で座布団をまわす、
その後に続いて両足で子供が入った水瓶をまわしてみせる曲芸]

※水瓶は簡単に終わらせる

※幸運券でカメラ販売*韓国人司会者 <fm> で約7分(14:12-14:19)

「デジタルカメラはコンピュータが必要、誰もが簡単に使えるカメラがこの先
も売れていく」などといい、現金手数料29980ウォンのところを30000ウォ
ンとって販売する

⑰赤いカーテンを用いた空中妙技*中国男性1名と中国女性1名で約6分
(14:19-14:25)

[天井からつるしたカーテンをまわしながら、その上で男女2人がアクロバ
トを行う]

⑱マンボ* <bm> に補助として <cm> で約5分(14:26-14:31)

韓国サーカスの今日的状況に関する研究ノート：
運営形態、演目、構成メンバー

[円筒に板を置いたうえにあがり、バランスをとってみせる曲芸]

⑨ 9人組体操*中国男性7名と中国女性2名で約5分(14:32-14:37)

[数名の曲芸師が出演して組み体操を行う]

(14:37 終了のアナウンス)

3. 中国サーカスによる影響

3-1. 韓中間のトラブル

先述したとおり中国雑伎団からの曲芸師が入りだしたのは、おおよそ2000年頃からであり、東春サーカスが始めた。それまで、中国の曲芸師が入ってこなかった理由は、①中国雑伎団の曲芸師を招請する窓口の問題や、②外国人曲芸師を呼ぶことへの抵抗感が大きかったことなどが考えられる。韓国の各サーカス団は、長らく外国人曲芸師を受け入れず、韓国曲芸師たちだけによる劇場設営などの作業や演目形態を続けてきたために、「よそ者」を受け入れにくい体質になっていたと指摘できる。また、実際に中国人曲芸師を呼ぶことは外国人労働者を雇用することなので、入国管理などの手続きを行い、かつそれらの機関の干渉を受けることになる。長く独自のスタイルを通してきた各サーカス団の韓国人団長には、そのことも障壁になっていたように思われる。

また、中国人曲芸師を呼んできたからといって、必ずしも興行が順調にいくわけでない。彼らとの間には、さまざまトラブルが生じる。実際に東春サーカス団で聞かれたのも、中国人曲芸師を入れてからのトラブルの連続であった。韓国側と中国側のどちらか一方にすべての原因があるわけでないが、大きく分けると次のようになる。

韓国側に原因が求められるのは、①賃金の問題である。契約は、送り手である中国の雑伎団との間で行われ、送り込まれた個人に何の権利もない。また、公演期間に支給される日当も韓国人曲芸師の4分の1ほどであったりす

る。そのため、韓国人曲芸師が頻繁に口にするジュースやコーヒー、酒類も彼らにとっては気軽に口にできない。このことに対し、韓国人曲芸師や下まわりはとくに意に介さないが、これらは中国人曲芸師に強い不満として残る。②作業分担の問題である。中国では、曲芸師は曲芸のみを担当し、韓国サーカスのように劇場設営などを行う「労働」を請け負うことはなかった。労働に関しては、韓国人曲芸師のなかにも反発があるが、中国人曲芸師には強い不満となり、当初は対立の大きな原因となった。近年では、わずかながらも労働報酬を与えることで、中国人曲芸師も労働に参加することになった。また中国人の女性曲芸師に対しても、封筒にチラシを詰めたりする作業を手伝わせることが多い。

以上のように、韓国側に求められる問題としては、主に待遇に関する問題であり、それが両者の溝をつくりあげている。

中国側に原因が求められるのは、①韓国サーカスの曲芸を見下した態度や韓国人曲芸師への不信感が挙げられる。道具管理に対する意識の差ともいえるが、一切、韓国人曲芸師に道具をさわらせなかったし、誤解があったのかもしれないが、片づけを手伝おうとただで強い口調で文句をいわれたらしい。手品道具に至っては、運搬を手伝うことが手品の仕掛けを盗むと思われるとも聞いた。それに加えて、②韓国的な習慣になれていない点も問題といえる。中国人曲芸師はほとんどが10代から20代前後までの若い曲芸師であるにもかかわらず、韓国人の年配曲芸師に対して、とくに敬意を払わない態度をとったとされることである。韓国では、一般に上下関係が厳格で、それは一歳の違い、より厳格には誕生月によって序列ができる。韓国サーカスでも同様に、長らくサーカスで生活をした人間は、年齢の上下において「兄弟」、「姉妹」となっていく。そのルールに適合せず、平等な態度を貫くことは、「礼儀を知らない中国人」といった偏見を植えつけていくことになる。

3-2. 中国人導入による公演形態上の影響

前章で紹介したように、1990年代の公演と2000年代の公演との差をみていく。全体の公演時間や1日4回の連続公演の形態は変わらないものの、内容をみたとき、大きな違いがでている。まず、曲芸師が韓国人から、大半が中国人に変わったが、そのことによって行われる演目に変化した。韓国では、「肩芸」や「足芸」といった日本サーカスの影響を受けた曲芸も色濃く残っていたが、雑伎団系のポールや体操輪ぐり、縄を用いた空中曲芸などが目立つ。また、同じくジャグリングや手品といっても、帽子を用いるジャグリングやピンポンや十字型のブーメランを用いたり、ヨーガ妙技でも座布団を用いた足芸、手品も仮面マジックといったように、同じ演目名でも内容が雑伎団でみられるものにとって代わられた。フラフープも西洋サーカスなどでよくみられるが、近年では雑伎団でもよく行われる演目である。看板は韓国サーカス、あるいは合同公演でも、内容は大半が雑伎団となってしまったのである。

さらに大きく影響を及ぼしているのが、中国人曲芸師をつかって行われる「イベント」である。イベントとは、地方自治体などで行われる祭りや、企業が主催する各種の催しに呼ばれて公演するもので、10名ほどの中国人曲芸師だけをバスなどに乗せて派遣して曲芸を行う。2000年5月から中国人曲芸師が韓国のサーカス団で曲芸をし始めたといわれるが、しばらくしてからイベントという形態を並行させて行ってきた。

当初、中国人曲芸師による公演は珍しかったので、1回あたりの公演で450万ウォンほどで派遣していた。しかも、出張にでると中国人には1人あたり20万ウォンほどを請求しているのに、5000ウォンずつの手当しか与えていないので、利潤は大きかった。ところが、同じように中国人曲芸団を呼んできてショーをみせるイベント会社が増え、近年では価格が下がり、300 - 350万ウォンほどになった。近場では200万ウォンのときもある。また回数も、以前は6-7月を中心に、年に100回近くでいていたが、少し減ってきてい

る。8月でも月に2回しか入らなかつたりもする。しかも移動距離も遠くなり、たとえば慶尚北道奉化郡にしながら全羅南道莞島郡まで片道300km以上の距離も行く。

さらに、イベント自体がサーカス公演にもたらす弊害も無視できない。イベントは基本的に自治体や企業体との契約で公演を行うため、観客は無料で観覧できる。そこで、一般の人々の感覚として、無料で観覧できる曲芸なのに、サーカスまで足を運んで入場料まで払って観覧する人々はいないというのである。忠清南道天安市では1日の売上げが9万ウォンしかなかったときがあった。これは1日の観客が10人ほどであったことを意味し、日当が得るはずもないという。また毎年、大幅な収入が見込める「江陵端午祭」でも、今年度は赤字であったという。同様に、観客動員が見込める「晋州開天芸術祭」でも観客が減っているらしい。そこで悪循環となり、イベントでの収入が、主な収入となりかけている。しかし、最近イベント会場の公演ですら連続で行くと観客が入らなくなっている。

ただし、それでも中国人曲芸師にたよらざるを得ない理由には、韓国サーカスの衰退とともに曲芸師がサーカスを離れたことや、韓国人曲芸師の高年齢化が挙げられる。韓国人曲芸師のなかに若年層がないわけではないが、サーカスにとどまっている曲芸師には30代が多く、40代-50代も見受けられる。これまで「斜陽産業」として後継者を育ててこなかった責任もあるだろう。あるいは、サーカスへの求心力が落ちたことで、サーカスに入団する人々の数が減り、後継者を育てたくても育てられなかった韓国サーカス側の事情もある。先の演目をもて一目瞭然で、1990年代には一線で働いていた<4m>は現在ではほとんど曲芸をしない。<8f> = <ef> も50代に達したため、負担の少ない曲芸だけにしかでておらず、針金渡りなどは若い<af>などに任せている。極端に韓国人曲芸師による曲芸が減り、以前であれば、一線の曲芸師として公演をしていた曲芸師が、すでに曲芸を見守る補佐役にまわっ

韓国サーカスの今日的状況に関する研究ノート：
運営形態、演目、構成メンバー

ている。曲芸は中国人、劇場設営や下まわりは韓国人といったように、色分けが進んできている。しかもそこに、収入のよい下まわり（韓国人）と収入がよくない曲芸師（中国人）といった構図が絡む。

4. 結び

以上のように、韓国サーカスに、中国人曲芸師が組み込まれたのは、ちょうどその時代によるところともいえる。つまり、韓国サーカスの衰退による曲芸師不足の時期と、国交正常化で得た巨大市場の中国への関心が高まった時期の重なりである。中国は偶然に雑伎団という優良な曲芸師を「産出」する国家でもあった。さらに、距離的にも近い彼らとの間は、両国の賃金格差で成り立っている。中国人曲芸師は、ある意味で時代の流れに沿った選択といえ、それゆえにまだ「韓国サーカス」が命脈を保っているのである。

しかし、スタイルが固定化されつつあった韓国サーカスへの「中国」導入は、それほど容易でなかったといえる。両国の曲芸師間の対立や待遇問題で、トラブルを抱えてきた。また、半年ごとの更新で、2年までの延長しかビザが認められない。中国人曲芸師が韓国社会に適応してきた頃に、帰国を強いられるのである。したがって、その度ごとにまた韓国社会に慣れていない曲芸師を受け入れることも、同様のトラブルを繰り返す主原因となった。

ここにみられるトラブルは、ある意味で現代韓国が迎えている外国人労働者問題と同様な構図をもっている。10年前まで韓国人の下まわりや曲芸師が行ってきたことを、中国人曲芸師が代行している現状を、語弊を覚悟していえば、今や「3K」化してきた韓国サーカスに、新たに「外国人労働者」を引き入れているのと類似している。一見、特殊集団にみえる移動集団（サーカス）も、まさにホスト社会をそのままに映しだしていたのである。「熟練工」としての韓国人曲芸師の高齢化も社会の縮図といえる。

最後に、「韓国」的な集団に「中国」的なものが導入されてきた影響につい

て簡単に述べると、次のようなこともいえるだろう。

韓国／朝鮮におけるサーカスは、一般に日本を經由して入ったとされる。当初は、朝鮮半島から満州まで広く興行を行い、構成員は日本人、朝鮮人、満州／中国人と混在した状態であった。それが、韓国／朝鮮の独立解放を迎え、北朝鮮においては、国家が管理する態勢に徐々に移行する。韓国では、日本人曲芸師や中国人曲芸師がいたものの、新たに入団する者は韓国人で、徐々に韓国人だけの集団となっていった。そこに近年になって、また新たに中国人曲芸師が参入してきたのである。

今日の韓国で、自国のサーカスを紹介するとき、本稿で述べてきたように、ときに「韓国」サーカスに「中国」が入り込んできたように説明されるかもしれない。しかし、韓国(朝鮮)にサーカスが入ってきた当初を思えば、実は「国籍」(しばらくして「日本」に統一されることがあっても)が混在した状況であった。それが土着化する過程で「外国」籍が排除されていったにすぎない。あるいは、それによってサーカスが1つの娯楽形態として「韓国」社会に根づいたといえるのだろう。

そのように考えたとき、再び「外国」籍が混在してきた現在、また新たなジャンルへとサーカスが踏みだすきっかけになっているといえるかもしれない。引き続き、韓国サーカスの第2ステージを注視していきたい。

参考文献：

林史樹

2007『韓国サーカスの生活誌』風響社

聶莉莉

2005「中国朝鮮族の民族的ネットワークと連帯感」『アジア遊学』81, pp. 24-37